

序 文

乳癌の罹患率と死亡率は、年々、増加の一途をたどっています。近年、手術法が進歩し、新しい薬剤の開発が進み、乳癌を取り巻く医療は大きく変化していますが、最も効果的に死亡率を下げるためには、この検診が一番重要です。ただ、乳癌検診といえば、マンモグラフィが世界のスタンダードになっています。乳房超音波検診が死亡率を下げる科学的な根拠(エビデンス)は、残念ながらありません。では、マンモグラフィ検診だけで良いのでしょうか？ 海外の実情はわかりませんが、少なくとも日本にいる専門家は、十分とはいわないでしょう。エビデンスはなくても、自分の家族なら、超音波検診も受けるように勧めると思います。やはりわが国で乳癌を早期発見するためには、超音波検診をきちんと行うことが急務であると考えます。

超音波装置は、マンモグラフィと違い、多くのメリットがあります。特別の専門施設でなくても装置を持っていること、他の臓器(検査)にも使えること、被曝の心配のないことなどが挙げられます。これなら受診率が50%を超えても施設面では十分に対応できると思います。これに質の高い人的要因(走査や読影)が加われば、乳癌検診として安心して効率的に行えます。マンパワーとして、乳腺専門施設のスタッフだけでは足りません。多くの婦人科や開業医の先生にも参加してもらう必要があります。力を合わせて早期発見を目指しましょう。

では、超音波検診は、どうやったらいいのでしょうか？ 本書は、この疑問に答えるべく、「この1冊があれば、乳がん検診(超音波検診)はどうかできる」ことを目標に作成しました。超音波検診をしながら、いつも手元に置いて見るガイドブックです。乳癌の疫学から診断、病理、超音波検査の手技や方法、各疾患の超音波画像、判定基準や実例、所見用紙や紹介状の書き方、さらには受診者への説明や啓発に至るまで、本書で超音波検診のすべてを網羅できるようにそれぞれの専門家に執筆してもらいました。ガイドラインや乳房超音波検査に関する専門書は、超音波診断のすべてを追求するため、内容は複雑で初学者には理解できないことも多く含まれています。本書は、これまでの専門書とは少し趣を異にして「検診」を主題に、対象も乳腺の専門家だけではなく、婦人科や開業されている先生方を含め、これから検診を始めようと考えている先生方にも役立つようにわかりやすく解説しました。本書の基本理念にもありますが、すべての乳癌を検診で100%見つけることは、どんな天才ソノグラファーや専門医でも不可能です。DCISで代表されるような非腫瘍性病変にこだわりすぎずに、見つけなければならない乳癌(浸潤癌)を意識して、それを確実に検出することが検診として大切なことです。過剰な要精査を出すことは、受診者に多くの不安をもたらします。必要なものを拾い上げ、大丈夫なものを落とす。これを本書の内容に沿って、怖がらずに行えば、必ず良い結果につながると確信しております。

本書が日常の検診において多くの医師や技師にお役に立てることを願っております。

ちば県民保健予防財団総合健診センター
橋本 秀行